

©シナリオ【菊池】
決定稿（一九八九年十二月脱稿）
イワモトケンチ

T●製作会社クレジット

ベース音（空調音）が小さく響く。
菊池が階段を上がって来る状況音。
人の話し声が反響している。

T●主要キャストクレジット

状況音が続く。
階段から廊下へ。
ドアを開ける音。

T●主要スタッフクレジット

段々ベース音が大きくなってゆく。
クリーニングのカゴを引く音

T●タイトル「菊池」

ベース音がピークに達して消える。

S#一●東京クリーニング・乾燥機室

（火曜日・午前八時三〇分頃）
薄暗い室内。
窓から間接光が入って室内奥を照らしている。
歩いて来る、菊池。
近づく足音と菊池のシルエット。
菊池、入って来る。
入口脇にあるブレイカーを上げる。
不規則に点灯し始める蛍光灯。
歩き出して右列乾燥機へと近づく。
手前から順々に乾燥機の電源を入れてゆく。
小さな電気音がひとつひとつ重なってゆく。

右列全ての電源を入れる。
増幅する電気音。
入口付近から足音が聞こえる。
振り向く、菊池。
入口に係長が立っている。
係長の後ろには男。
「（小さくお辞儀して）……ございます」
「（笑って）おはよう」
係長、菊池に手招きする。
それを受けて静かに移動し始める、菊池。
係長、振向いて男を見る。
男、前を見据えて立っている。
係長、「もつと前へ」とジェスチャーする。
男、二歩前進する。

菊池、係長の前で立ち止まる。
男をちらりと見る、菊池。
男、菊池を直視する。
慌てて目を伏せる、菊池。
係長、紹介する。
「アオヤマ君……。菊池君」
菊池、男に軽く会釈する。
菊池を直視したまま数センチお辞儀する、男。

S#二 ● 東京クリーニング・乾燥機室

（火曜日・午前九時頃）
左列の乾燥機の前に立つ男と菊池。
菊池、洗濯済みシーツのカゴを引き寄せる。
摩擦音。
男、菊池の後方に立って無表情に見つめている。
乾燥機の蓋を開けて慣れた手つきでシーツを入れてゆく。
蓋を閉めて乾燥機を運転させる。
回転音が静かに響き始める。
「（乾燥機を見ながら）片列七台あります。」

七台、順々に、こうやって入れて行って下さい」
「……」
菊池 「乾燥まで、二〇分かかりますから、時間が余ったら、椅子に座って待っていて下さい」

男、長椅子を見る。
菊池、足速に歩き出して右列へ移動してゆく。

菊池をにらむ様に見ている、男。
菊池、右列に置いてあるカゴを引いて戻って来る。

菊池を見続けている、男。
カゴを男の前に置く。
中にはきれいにたたんだシートが入っている。

菊池 「（カゴを見て）乾燥が終わったら、こんな感じでしたんで……」

男 「（カゴの中を見る）」

菊池 「（入口方向を指し）……あの奥に運んで下さい」

男 「（入口方向を見る）」

菊池、静かに顔を上げて男を見る。

急に向き直って菊池を見る、男。

菊池、慌てて視線を外す。

「……じゃあ、お願い、します……」

菊池、男を見ないで右列へ移動してゆく。

歩いてゆく菊池を見ている、男。

菊池、乾燥機の前まで移動して小さく掘り向く。

男と視線が合う。

S#三 ●東京クリーニング・乾燥機室

（火曜日・午前十時三〇分頃）
全ての乾燥機が運転している。
大きな機械音が響く。

菊池、男に背を向けて長椅子に座っている。うつ向き加減に前を見ている。男は乾燥機の前に立ってシーツをたたんでいる。ぎこちない手つきで遅い。首筋に汗が流れている。菊池、小さく振向いて男を盗み見る。急に振向いて菊池を直視する、男。菊池、慌てて視線を外して目を落とす。しばらく菊池を見続けた後、再びたたみ始める、男。菊池、視線を落としながらも男を気にしている。

S#四●東京クリーニング・乾燥機室

(火曜日・午前十時頃)

右列乾燥機の前にはそれぞれ洗濯済みの衣類が置かれている。

菊池、右列奥の乾燥機の前に立っている。

乾燥機の蓋を開ける。

金属音。

中から乾燥済みのシーツを素早く出して隣の(洗濯済み)カゴの上へのせてゆく。

入口方向へたたんだシーツのカゴを運んでゆく、男。

菊池、全て出し終わると洗濯済みシーツを素早く乾燥機へ投げ入れてゆく。

蓋を閉じて運転させる。

ゆっくり乾燥機が回り始める。

男、カゴを置いて戻って来る。

長椅子へ移動して座る。

作業着で額の汗を拭う。

続いてズボンのポケットから煙草を出してくわえる。

菊池、隣のカゴの上に乗せたシーツを素早くたたみ始める。

たたんだシートを空のカゴへ入れてゆく。
男、百円ライターで煙草に火を点ける。
その音を聞いて振向く、菊池。
男、煙を深く吸い込んで静かに吐き出す。
男に向かつて静かに歩き出す、菊池。
男、菊池を見上げる。
菊池、立ち止まる。距離、二メートル程。
「（小さな声で）ここ：禁煙なんです：」
男、煙草をくわえたまま菊池を直視し続ける。
小さくお辞儀して向き直る、菊池。
奥へ歩き出す。
男、しばらく菊池の後ろ姿を見続けている。
菊池、元の位置に戻って作業を再開する。
無造作に煙草を床に落として靴でもみ消す、男。

S#五●東京クリーニング・乾燥機室

（火曜日・午後三時頃）
全ての乾燥機が止まっている。
菊池と男、互いに背を向けるかたちで長椅子に座っている。
二人の間におぼんが置かれている。
おぼんの上には湯飲み茶碗と最中がのった皿ふたつ。
菊池、両手で茶碗を持ってお茶飲んでいる。
お茶を飲む音。
猫舌なのか片手で茶碗を持って息で冷ましている、男。
菊池、茶碗を置いて最中を取る。
最中を一口食べる。
無表情にもなかを噛む、菊池。
男、茶碗を用心深く静かに口に近づけてほんの少しすすす。
菊池、無表情に最中をもう一口食べる。

S# 六 ● Aスーパー・店内

(火曜日・午後六時頃)
レジ付近。
レジは二台ある。
一台には四十代後半の主婦がスーパーのエプロンを着けて立っている。
客が三人並んでいる。
もう一台には女が同じスーパーのエプロンを着けて立っている。
客が四人並んでいる。
菊池、カゴを手に持って静かに歩いてレジへ近づいてゆく。
五人目の客として女のレジに並ぶ。
女、うつむき加減でレジを(バーコード)打っている。
時々女を盗み見る、菊池。

S# 七 ● Aスーパー・店内

(火曜日・午後六時十分頃)
菊池、レジカウンターにカゴをのせる。
女、少し顔を上げて菊池を見る。
視線をそらす、菊池。
「(事務的に)いらっしやいませ」
女、菊池のカゴを引き寄せてレジを打ち始める(千ミリパック牛乳、六枚切り食パン、スナック菓子)。
再びうつ向き加減になる、女。
菊池、女を見つめる。
レジに値段が表示される。七一円。
菊池、コートのポケットから財布を取り出す。
「(事務的に)七百十一円になります」
菊池の商品をビニールに素早く入れる、女。
菊池、財布から千円札を取り出して置く。
続いて小銭を手のひらに出して見る。

女、ゆっくりと千円札を受け取ってレジにはさむ。

菊池の様子をうかがっている、女。

菊池 「顔を上げて小さな声で」十一円、あります」

菊池と女、視線を合せる。

微妙に視線をはずして十一円を置く、菊池。

女、レジを打つ。

おつりの値段が表示される。

レジからおつりを取って菊池に差し出す、

女。

女 「(事務的に)三百円のお返しになります」

菊池、おつりを受け取ろうと手を差し出す。

女の手と菊池の手が軽く接触する。

少し顔を上げて女を盗み見る、菊池。

女、体をレジスターに向けて菊池の千円札

をレジスターの中に入れる。

静かにスーパーのビニール袋を持ち上げて

出口へ移動し始める、菊池。

女の声 「(事務的に)いらっしやいませ」

菊池、小さく振り向いて女を見る。

女、次の客の対応を始めている。

S#八●菊池のアパート・室内

(火曜日・午後八時頃)

テレビの音声。

菊池、六畳間中央に立っている。

覗きスタイルに着替えている。

手に帽子を持っている。

テレビの前へ移動して消す。

六畳間の電灯を消す。

台所の電灯だけとなる。

台所へ移動して流しに立つ。

流しの鏡に顔を写す。

帽子をかぶる。

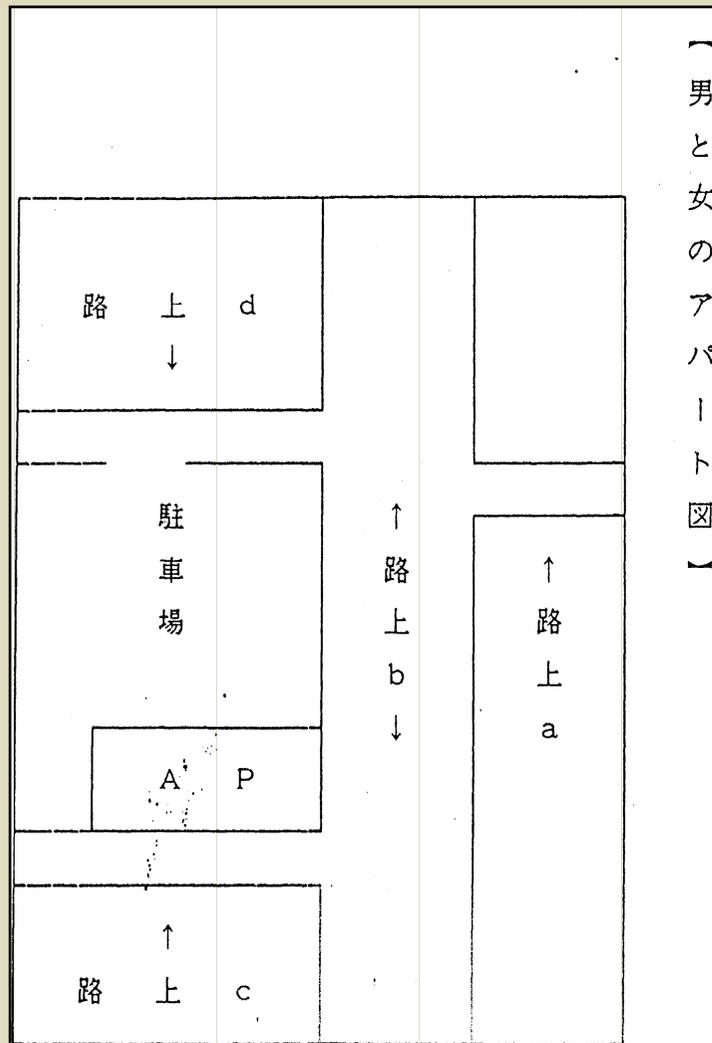
鏡を見ながら眉毛が隠れる位に深くかぶる。

静止して鏡の中の自分の顔が無表情に見続

けている、菊池。

S#九●男と女のアパートの前・路上

【男と女のアパート図】



※アパートを囲む道は図の様になっている。
以下人物の立ち位置を路上 a、b、c、d の記号で
示してゆく事にする。

(火曜日・午後八時三〇分頃)

路上 a のブロック塀の陰に隠れる様にして
立っている、菊池。

全身黒の覗きスタイル。

両手をコートのポケットに入れて寒そうに
立っている。

菊池の立っている場所からアパートの入口
(駐車場の入口)が見える。

路上 b の上方向から自転車に乗った女が走
ってくる。

自転車のライトが強く光ってこっちらに向
かって来るが、女の顔は明確ではない。

菊池、静かに歩き出して路上 a へ移動して
ゆく。

駐車場の入口で自転車を降りてアパートに

向かって歩き出す、女。菊池、女を見ながら路上b下方向へと足速に歩き出す。アパート下に自転車を止めて自転車の鍵をかけている、女。
菊池、女を見ながら路上aから路上cへと曲がってゆく。
路上cを数メートル歩き電柱の陰に立つ。
上を見上げる、菊池。
その位置から男と女の部屋の窓がよく見える。
部屋にはまだ電灯が点っていない。
菊池、周りを気にしながら窓を見上げている。
部屋の電灯が点る。
ピンク色のカーテンが透けて見えている。
女の影が移動して窓に近づく。
重心を電柱に傾けて半身の体勢で窓を見続ける、菊池。
女の影、窓から遠ざかって消える。
体勢を入れ変えて窓を凝視し続ける、菊池。

S#一〇●東京クリーニング・乾燥機室

(水曜日・午前十時頃)
全ての乾燥機、運転している。
菊池と男、お互いに背を向け合って座っている。
入口の壁に掛けてある時計を見上げている、菊池。
男、両足を伸ばして天井を見上げている。
振向いて菊池を見る、男。
菊池、ちらりと男を見る。
菊池を見続ける、男。
菊池、顔を戻して前を見る。
菊池を見続ける、男。
菊池、小さく振向いて男を見る。
視線を合せる、二人。

菊池

「…え？」

男、何も言わずに見続ける。

静かに目を伏せて向き直る、菊池。

菊池、向き直った後も男を気にしている。

しばらく見続けた後に向き直る、男。

男、再び天井を見上げる。

立ち上がる、菊池。

S# 一二 ● 東京クリーニング・乾燥機室

（水曜日・午前十一時頃）

菊池、洗濯済みのカゴを押し入って来る。

摩擦音。

乾燥機の前に立ってシーツをたたんでいる、

男。

男の手つきは相変わらずぎこちなく遅い。

舌打ちしながら作業をする、男。

菊池、カゴを手前の乾燥機の前に置く。

他六台の乾燥機の前にも同じカゴが置かれ

ている。

奥へ移動してゆく、菊池。

男のたたむ手つきが徐々に乱暴になってゆく。

額に汗をかいている、男。

菊池、奥の乾燥機の前で立ち止まる。

乾燥機は止まっている。

蓋を開けて乾燥したシーツを出し始める。

出したシーツを隣の乾燥機の前に置いてあ

るカゴの上ののせてゆく。全て出した後、

カゴの洗濯済みシーツを素早く入れて運

させる。

男、手を休めて菊池を凝視している。

一旦置いた乾燥シーツを空になったカゴの

中へ素早くたたみながら入れてゆく、菊池。

男、菊池を見続けている。

S# 一二 ● 東京クリーニング・乾燥機室

(水曜日・午後十二時頃)

全ての乾燥機、止まっている。

菊池、長椅子に一人座ってサンドイッチを食べている。

サンドイッチを食べる音。

椅子には二五〇ミリパックの牛乳。

サンドイッチを無表情に食べ続ける、菊池。

牛乳を手にとってストローで飲み始める。

サンドイッチを飲み込む。

牛乳をもう一口飲む。

サンドイッチの最後のかたまりを口に入れる。

無表情に何度も噛む。

牛乳を飲み干してビニール袋の中に入れる。

立ち上がる。

入口近くにあるゴミ箱に向かって歩き出す、菊池。

男、両手に缶コーヒーを持って入って来る。

ビニール袋を手を持ったまま男を見る、菊池。

男、ゆっくり菊池に向かって歩いて来る。

菊池、無表情に男を見ている。

男、右手に持った缶コーヒーを無造作に差し出す。

「……？」

「(ぶつきらぼうに)当たった」

男、缶コーヒーを更に前へと差し出す。

迷いながらも静かに手を伸ばして缶コーヒーを受け取る、菊池。

男、手渡すと長椅子へと向かって歩き出す。手にした缶コーヒーを不思議そうに見ている、菊池。

男、長椅子に座って缶コーヒーを強く数回振る。

ビニール袋をゴミ箱に捨てる、菊池。

静かに椅子に向かって歩き出す、菊池。

男、缶コーヒーの蓋を開ける。蓋を開ける

カン高い音。
缶コーヒーを飲み出す、男。
菊池、男に背を向けて長椅子に座る。
しばらく缶コーヒーを両手で持って見つめる、菊池。
男、缶コーヒーをジュースの様にごくごく
と飲む。
菊池、蓋を開ける。カン高い音。

S# 一三●東京クリーニング・乾燥機室

(水曜日・午後四時頃)

全ての乾燥機、運転している。低く重い機械音。

菊池、入口寄りの乾燥機の前に立ってシーツをたたんでいる。

奥寄りの乾燥機の前で作業をしている、男。係長、入って来る。

入って来た係長を見る、菊池。
男も係長に気づいて、見る。

深刻な顔をした係長、菊池に向かって歩いてゆく。

菊池、手を止めて近づいて来る係長を見る。二人を気にしながら作業を続けている、男。

係長、菊池の前で立ち止まる。
男の方をちらりと見た後、菊池を見る。

「(ひそひそ声で)あれ駄目だよ」
「：？」

「ちゃんと、教えてくれた？」
「あ、：はい：」

男、手を休めて二人をにらむ様に見る。
「そう。でもあれじゃあ駄目だよ」

「はい：」
「悪いけど、もうちょっとちゃんとたたむように言ってくる？」

「あ：。はい：」

菊池、男をちらりと見る。

係長
菊池

「悪いけど、頼むね」

「はい：」

出てゆく、係長。

菊池、出てゆく係長を見ている。

向き直って男を見る、菊池。

男、立ち尽くしたまま菊池を直視し続けている。

男に向かつて静かに歩き出す、菊池。

男、近づく菊池を直視し続ける。

菊池、伏目がちに男に近づいてゆく。

男の前で立ち止まって顔を少し上げる、菊池。

菊池

「あの：。乾燥済みシーツのたたみ方：。なんですけど：」

男の顔、硬直してゆく。

菊池

「ゆっくりで結構ですから。もっとちよつと丁寧にお願いします：」

男、顔を真赤にして菊池を睨んでいる。

男を見ないで小さくお辞儀をする、菊池。

右列の乾燥機へと移動してゆく、菊池。

男、菊池を睨み続けている。

乾燥機の前へ移動して作業を再開する、菊池。

男

「（大声）あつ！」

男、大声と共にたたんだカゴを蹴り飛ばして倒す。

カゴが倒れる大きな音と共にシーツが散乱する。

素早く振向いて男を見る、菊池。

男、足速に入口方向へ歩き出す。

足速に出てゆく、男。男の顔は硬直して真赤。

菊池、出てゆく男を目で追う。

男の姿が完全に消える。

入口を見つめ続ける、菊池。

（水曜日・午後八時三〇分頃）
路上 a 奥。
菊池、隠れる様に立っている。
路上 b を見つめている。
しばらく見た後、もう一度路上 b を見る。
人通りはない。
菊池の後ろから足音が近づいて来る。
小さく振り向いて後ろを見る、菊池。
路上 a 奥から三〇代のサラリーマン風の男
が近づいて来る。
菊池、素早く顔を伏せて更にブロック塀に
近づく。
サラリーマンの足音が近づいて来る。
菊池、じっと耐える様に動かないでいる。
横目で菊池を見ながら通過してゆく、サラ
リーマン。
路上 b にさしかかる。
菊池、静かにゆっくりと顔を上げてサラリ
ーマンを見る。
サラリーマン、右に曲がろうとする。
当時に振り向いて菊池を見る、サラリーマ
ン。
菊池、慌てて下を向く。
少し首を傾げて歩き出す、サラリーマン。
フレームから消える。
菊池、路上 b を見る。
人通りはない。
腕時計を見る。
しばらく見た後、歩き出す。
路上 b に出てアパートを見る。
男と女の部屋には電灯が点っていない。
しばらく見た後。
路上 b に向かって歩き出す、菊池。

S# 一五●男と女のアパート近くの夜道

（水曜日・午後九時頃）

S# 一六 ● 男と女のアパートの前・路上

菊池、両手をコートのポケットに入れて歩いてゆく。
前方から二台の自転車が走って来る。
ライトが揺れている。
男と女の自転車。前を走っているのが男。
後ろが女。
菊池、自転車を見る。
道の端へと顔を隠す様子ながら寄ってゆく、菊池。
男と女の自転車が菊池の横を通過してゆく。
菊池、立ち止まって振り向く。
走り去る男と女を目で追う、菊池。

(水曜日・午後十時頃)

菊池、路上b上方向から歩いて来る。
路上bからdへと曲がり、アパートの入口(駐車場)へ入って行く。
男と女の部屋の台所には電灯が点っている。
台所の窓を見上げながら駐車場の中を歩いてゆく。
アパートに近づいてゆく。
アパートの下には男と女の自転車が仲良く並んで置いてある。
周りを気にしながら自転車に近づく。
静かに女の自転車のイスに手を伸ばして触る、菊池。

S# 一七 ● 菊池のアパート・室内

(水曜日・午後十一時頃)

菊池、パジャマ姿でベッドに横になっっている。
無表情にテレビを見ている、菊池。
遠くで猫の泣き声が聞こえ始めるが、テレビの音声と重なって聞き取り難い。
起き上がってテレビへ移動する。

チャンネルを変えろ。
猫の泣き声が徐々に大きくなる。
顔を台所方向へ向ける。
テレビのボリュームを落として耳を澄まして聞く。
泣声が連続的になる。
立ち上がって台所へ移動する。
玄関口へ静かに近づき、ドアの内鍵を静かに開ける。
ドアを静かに十センチ程度開ける。
その隙間から外（廊下）を見る。
アパートの共同階段に猫の顔が見える。
猫、階段に座って菊池を用心深く中腰で見ている。
菊池、静かにゆっくりとドアを更に開けて屈む。
猫、菊池に向かって泣く。
玄関口で屈んだまま猫を見ている、菊池。

S# 一八 ● 菊池のアパート・室内

（水曜日・午後十一時三〇分頃）
ストーブの前で猫、小皿に入った牛乳を不器用に飲んでる。
菊池、猫の隣に座ってやさしく見ている。
猫、牛乳から離れて毛づくろいを始める。
全身をなめまわす、猫。
やさしく見続けている。
猫、ストーブに近づいて安定する。
猫を持ち上げて自分の膝の上にのせる。
猫、菊池の膝の上で一番座り心地の良い場所を探した後。
安定する。
猫の頭をやさしく撫で始める。
猫、気持ち良さそうに目を閉じる。
「ぐるぐる」と喉を鳴らし始める、猫。
猫を撫で続ける。

S#一九●菊池のアパート・室内

「ぐるぐる」がどンドン大きくなってゆく。
気持ち良さそうに目を閉じ続ける、猫。
猫を撫で続ける、菊池。

（木曜日・午前一時頃）

室内の電灯、全て消されている。

菊池、布団に入って眠っている。

布団の中で猫がごそごそ動いている。

寝返りを打つ、菊池。

菊池、静かに目を開ける。

しばらく一点を見つめた後、布団を強く捲
つて上半身を起こす。

猫が布団の中から飛び出し、逃げ出す。

逃げた猫を鋭くにらんだ後、敷き布団を触
る。

ティッシュを箱ごと取り、濡れた布団を拭き
始める。

立ち上がって使用済みのティッシュをゴミ
箱に捨てる。

猫に向かって静かに近づいてゆく。

猫、逃げる。

追う、菊池。

猫、逃げる。

追う、菊池。

猫を捕まえて乱暴に持ち上げる。

「：こら：」

猫の頭を三回叩く。

三回目に鈍い音がする。

静止してゆっくり猫を覗き込む。

猫、動かない。

しばらく覗いた後、猫を畳に落とす。畳に
落ちる猫の生っぽい音。電灯を点ける。

こわばった表情で猫を見ている、菊池。

S#二〇●菊池のアパート近くのゴミ置き場

（木曜日・午前二時頃）
パジャマにコートを羽織った菊池、歩いて来る。
裸足で革靴を履いている。
ゴミ袋を抱える様に持って歩いて来る。
ぎこちない歩き方。
ブロック塀と電柱の間に設けられたゴミ置き場の前で立ち止まる。既に三つのゴミ袋が置かれている。
周りを見回す。
ゴミ置場の斜め向えに庭付の一軒家があり、その庭でジャージ姿の中学生らしい丸坊主の少年がバットの素振りをしている。
中学生、顔中汗をかいて真剣に素振りをしている。
殺気を感じる。
中学生に背を向ける様にしゃがみ込む、菊池。
ゴミ袋を静かに置く。
立ち上がってゴミ袋を上から見ると、再びしゃがんで他のゴミ袋を移動させる。自分のゴミ袋を一番奥に移動させる。
手を払い、ゴミ袋を見ながら立ち上がる。
しばらくゴミ袋を見ている。
はっとして勢い良く振り向く。
中学生が素振りを止めて菊池を見ている。
肩で息をしている、中学生。
素早く向き直る。
足速に逃げ出す様に歩き出す、菊池。

S# 二二 ● 菊池のアパート・室内

（木曜日・午前七時頃）
室内には朝の光。
菊池、眠っている。
外から複数の男の声が聞こえる。
続いて清掃車がバツクする警戒音。

菊池、急に目を開けて飛び起きる。
窓へ移動してカーテンを少し開けて外を見下す。
窓から覗き続ける。
男の掛け声に続いて清掃車の走り出す音。
しばらく同じ姿勢のままにいる。
静かにカーテンを閉める、菊池。

S# 二二三 ● 東京クリーニング・乾燥機室

（木曜日・午前十時頃）

全ての乾燥機、運転している。低く重い機械音。

菊池、洗濯済みのカゴを二つ引いて入口から入って来る。摩擦音。男、左列中央辺りの乾燥機の前に立って乱暴にシーツを投げ入れている。

カゴを手前の乾燥機前に置いて入口へと戻る。

戻る時にちらりと男を見る。

男、乱暴にシーツを投げ入れ続けている。

また二つのカゴを引いて入って来る、菊池。入口から三つ目の乾燥機へ移動してカゴを置く。

男を見る。

男、乱暴に蓋を閉めて乾燥機を運転させる。ふてくされた動作で隣の乾燥機へと移動する、男。

菊池、再び入口へと歩き出す。

S# 二二三 ● 東京クリーニング・乾燥機室

（木曜日・午前十一時頃）

菊池、椅子に座っている。

係長が足速に入ってきて来る。係長の乾い足音。全ての乾燥機、運転している。

菊池、顔を上げて係長を見る。

係長の顔、怒っているのか険しい。

男。

奥で作業している男を睨む様に見ながら歩いて来る、係長。
菊池、係長を目で追う。
投げやりな態度でシーツをたたんでいる、

係長、男の前で立ち止まる。

静かにゆっくり顔を係長に向ける、男。

男、係長を直視する。

無表情に二人を見続けている、菊池。

係長 「（感情的に）なんで、ちゃんとしないの？
君：」

男 「（直視）」

係長 「簡単な事でしょ？」

男 「（直視）」

係長 「聞いたんでしょ？菊池君に」

男 「（硬直してゆく顔）」

係長 「なにも難しい事じゃないでしょう！丁寧にやればいいだけの事：」

男、突然係長の左膝裏を強く蹴る。鈍い音がする。

係長、膝を折って倒れる。

膝を押えてうめく、係長。

菊池、ゆっくり立ち上がる。

カゴを蹴り倒す。

足速に歩き出す、男。

菊池、椅子の前に立ったまま男を見ている。

菊池の横を足早に通過してゆく、男。

菊池、男を見ている。

急に振向いて菊池を睨む、男。

菊池、慌てて目を伏せる。

そのまま出てゆく、男。

菊池、出て行った男を無表情で見ている。

しばらく見た後、係長を見る。

係長、倒れたまま小さな声でうめき続けている。
いる。

うめいている係長を無表情に見続けている、
菊池。

S#二四●東京クリーニング・乾燥機室

(木曜日・午後一時頃)

菊池、左列乾燥機の前に立ちいつもより急いでシーツをたたんでいる。シーツの擦れる摩擦音。

全ての乾燥機、運転している。

素早くたたんで隣の乾燥機へ移動する。

蓋を開けて乾燥シーツを素早く隣のカゴへのせてゆく。

乾燥機の中へ素早くシーツを入れる。

蓋をして運転させる、菊池。

S#二五●男と女のアパートの前・路上

(木曜日・午後八時三〇分頃)

菊池、路上bをアパートに向かって歩いてゆく。

アパートには電灯が点っている。

フェンス越しに置いてある自転車を見る。

置いてあるのは男の自転車だけで女の自転車はない。

路上bに画した窓を見上げる。

見上げると同時に窓が開き、煙草をくわえた男が吸殻の入った灰皿を窓から落とす。

ああてて顔を伏せて路上b上方向へと走り出す、菊池。

男、煙草をくわえたまま窓から走ってゆく菊池を見ている。

S#二六●ある夜道

(木曜日・午後九時頃)

トンネルの中を走り抜けて行く、菊池。

時々後ろを振り返りながら走ってゆく。

トンネルを抜けて三差路を右に曲がる。

後ろを振り向きながら走ってゆく。

前方に急な曲がり角が見える。

走りながら内角から曲がり角を曲がろうとする。

自転車のブレーキ音。

揺れる自転車のライト。

強く自転車と衝突して地面に倒れる、菊池。

自転車に乗っているのは女だ。

女、自転車にまたがったまま。

怯えた顔で菊池を見つめる。

「：大丈夫、ですか？」

菊池、上半身を起こす。

菊池

「（小さな声で）：大丈夫、です：」

顔を少し上げて上目使いに女を見上げる。

菊池の右の鼻から血が流れている。

菊池、女を見て表情を変える。

女、菊池を見ながら静かに自転車から降り

てスタンドを立てる。

恐る恐る屈んで菊池の顔を覗き込む、女。

女

「：血が：」

菊池、素早く起き上がる。

鼻水を吸い込む要領で二回鼻血を吸い込む。

女、コートのポケットからハンカチを取り

出してゆっくりと差し出す。

女

「：これで：」

菊池、手で鼻の下を拭って血を確かめる。

ハンカチを差し出したまま心配そうに見て

いる、女。

菊池

「（軽くお辞儀して）大丈夫です、から：」

女

「でも：」

菊池、もう一度お辞儀した後には逃げる様に

歩き出す。

女、心配そうに菊池を見ている。

段々と速足になってゆく、菊池。

数メートル歩いた所でぎこちなく振り向く。

女、同じ姿勢のまま菊池を見続けている。

菊池、ごまかす様なお辞儀をする。

急に走り出す、菊池。

S#二七●またある夜道

(木曜日・午後九時三〇分頃)
鼻血を流しながら走る菊池の顔。
カメラ、ぶれながらさがってゆく。

S#二八●菊池のアパート・室内

(木曜日・午後十時頃)
菊池、台所流し台の前に立って鏡に映る自分の顔を見つめている。右鼻から血が流れている。
鼻から口にかけて拭き取った血の後が残っている。
水道の蛇口をひねる。
水が強く流れ出す。
石鹸を手に取って丁寧に泡立てる。
石鹸を使って顔を洗い始める。
丁寧に何度もすすぐ。
水道の蛇口を閉める。
顔を上げて鏡を見る。
鏡に映る菊池の濡れた顔。
再び鼻血が静かに流れ出す。

S#二九●菊池のアパート・室内

(木曜日・午後十一時頃)
菊池、パジャマに着替えて布団に入ってテレビを見ている。
室内の灯りはテレビだけ。
菊池の鼻には鼻血止めのティッシュが詰められている。
無表情にテレビを見続けている、菊池。

S#三〇●東京クリーニング・乾燥機室

(金曜日・午前十時頃)
全ての乾燥機、運転している。
菊池一人、左列手前の乾燥機の前に立って

シートを急いでたたんでいる。摩擦音。たたみ終わったカゴが六つ、菊池の立っているまわりに置いてある。機械音が少し小さくなる。菊池、振向いて右列乾燥機を見る。奥二台の乾燥機が運転を停止している。素早くたたみ続けてたたみ終わる。七つのカゴの内四つを縦に並べて入口方向へ運んでゆく。係長が松葉杖を使って大儀そうに入ってくる。

菊池

「（小さな声で）：ございます」

係長

「（笑って）おはよう」

係長、歩きにくそうに菊池に近づこうとする。カゴから離れて手を貸そうと二歩近づくと、

係長

「（笑って）大丈夫：」

菊池

「：あ。はい：」

係長

「悪いね、忙しくて：」

菊池

「：いえ：」

係長

「来週、新しい人、入るらしいから」

菊池

「（会釈する）」

係長

「（笑って）悪いけど、頼むね」

菊池

「：はい：」

係長、笑って菊池を見る。視線を少し外す、菊池。係長、反転して出てゆく。大儀そうに出てゆく係長を無表情に見ている、菊池。

S# 三一 ● 東京クリーニング・屋上

（金曜日・午後十二時三〇分頃）

菊池、屋上のフェンスに持たれかかる様に座っている。

工場の巨大な空調音が低く響いている。

S# 三三二 ● 東京クリーニング・乾燥機室

上空を飛行機が通過して行く音。
空を見上げる。
光が目に入ってまぶしそうにする。
通過してゆく飛行機の音。
目を細めて上空を見上げ続けている。
飛行機の通過音が遠ざかってゆく。
空を見上げ続けている、菊池。

（金曜日・午後一時頃）

全ての乾燥機、止まっている。小さな電源音が響いている。
菊池、洗濯済みのカゴを縦に三つ並べて入って来る。摩擦音。
右列奥へ移動して奥から順に置いてゆく。
奥の乾燥機の蓋を開けてシートを投げ入れる。
蓋を閉めて乾燥機を運転させる。
乾燥機がゆっくり回り始める。
機械音が響き始める。
隣の乾燥機へ移動して蓋を開ける、菊池。

S# 三三三 ● 東京クリーニング・乾燥機室

（金曜日・午後三時頃）

左右列乾燥機の半分程、運転している。
菊池、椅子に座ってお茶を飲んでいる。
お茶を飲む音。
椅子の上におぼんが置いてある。
その上にたい焼きののった皿。
無表情に前を見ながらお茶を飲んでいる。
茶碗を持ったままたい焼きを見る。
たい焼きに手を伸ばして頭を一口食べる。
右手に茶碗、左手にたい焼きを持って前を見る。
無表情にたい焼きを噛む、菊池。

(金曜日・午後七時頃)

乗客は十人。

全員座っている。

菊池、後部座席右窓際の席に座っている。

窓に頭を寄りかけて眠っている。

菊池の隣にデパートの紙袋を膝にのせて座っている、太った婦人。背筋を伸ばして行儀正しい座り方をして真っ直ぐ前を見ている。

菊池、小さく首を上下に揺らし始める。

太った婦人、前を見続けている。

車内アナウンス。音が割れていて明確には聞こえない。

降車口近くの一人掛け座席に座っている中年男、無表情にブザーを押す。

眠っている菊池、規則正しく頭を揺らしている。

太った婦人、真正面を見続けている。

バスが停車する。

中年男、立ち上がる。

降車口が開く。

移動して降りてゆく、中年男。

菊池、目を開けて窓外を見る。

少し見た後、慌てて立ち上がる。

太った婦人、ゆっくり菊池の方へ首をパインさせて菊池を見上げる。

菊池、会釈して「すみません」と合図する。

太った婦人、一間あけて体を静かにずらす。

菊池、出辛そうに横歩きしてゆく。

降車口近くまで移動してゆく、菊池。

降車口が閉まりバスが走り出す。

菊池、倒れそうになつて吊り皮につかまる。

太った婦人、菊池を無表情に見ている。

婦人をちらりと見る、菊池。

菊池、太った婦人に背を向ける。

S# 三五 ● 夜のバス通り

吊り皮のシルバーシートに座った老女が菊池を気の毒そうに見上げている。菊池、老女を見ない様に窓外に目を向ける。

（金曜日・午後七時三〇分頃）
交通量の多い通り。車の通過音。
菊池、歩いてゆく。
菊池の横を次から次へと車が通過してゆく。

S# 三六 ● Aスーパー前・舗装道路

（金曜日・午後八時頃）
菊池、歩いて来る。
道は暗く、菊池の顔は明確ではない。
時々車が菊池の横を通過してゆく。
車が通過する時、菊池の顔が明確になる。
前方にスーパーの店内のあたりが見える。
歩き続ける。
スーパーに近づいてゆく。
顔を隠す様に下を向き足速になってゆく。
スーパー前の四つ角に差しかかる。
ちらりと店先を見る。
店先で店長らしい中年の男が閉店準備をしている。
同時にスーパーの電飾看板が消える。
足速にスーパー前を通過してゆく、菊池。

S# 三七 ● Aスーパー近くの路地

（金曜日・午後八時三〇分頃）
細くて薄暗い裏道。
菊池、息を荒らして走って来る。
前方にスーパーの前を通っている舗装道路が見える。
舗装道路と路地の境で立ち止まる。
ブロック塀で体を隠して前を覗く。
前方斜め向えにスーパーの裏口が見える。

息を弾ませながら体を路地側に戻す。
腕時計を見る。
再び覗き込む。
女、裏口のドアを開けて出て来る。
体を路地側に戻して大きく深呼吸する、菊池。

歩き出して道路へ出る。
左右を小さく確認した後に舗装道路を渡る。
女、裏口横にある自動販売機を横切って自転車置場へと歩いてゆく。
女を見ないように自動販売機の前へ足早に移動する。

女、自分の自転車の前で立ち止まって自転車に鍵を差し込んでいる。
自動販売機にコインを入れて缶コーヒーを買う、菊池。

C 女の声

かん高いコンピューター女の音が響く。
「マイドアリガトウゴザイマス。アキカンハクズカゴニ」

女、自然な目線で振向く。
缶コーヒーを取り出す為に屈んでいる、菊池。

その姿勢のまま女を見る。
女、菊池の顔を見ている。
缶コーヒーを取り出しながら女にお辞儀する、菊池。

女
「（菊池の事を思い出した顔）」
立ち直って二歩三步と女に近づく。

菊池
「：こん、ばんわ：」
更に一步女に近づいてゆく。

女
「：大丈夫、でした？」
菊池、更に一步。

菊池
「良かった：」

女
「（ぎこちなく笑う）」
すり足で更に一步女に近づく。

菊池と女の距離が一メートル以下となる。

女
菊池

女、自転車を引いて舗装道路へ出る。

「（お辞儀して）じゃあ：」

「（少し慌てて）：あ、はい：」

お辞儀をする、菊池。

女、自転車にまたがる。

もう一度お辞儀した後走り出す、女の自転車。

菊池、女の後ろ姿に向かってもう一度お辞儀をする。

ライトを点けた女の自転車が遠ざかってゆく。

缶コーヒーを手にしたまま立ち尽くしている、菊池。

S# 三八 ● 菊池のアパート・室内

（土曜日・午前八時頃）

鳴り続ける目覚まし時計の音。

聞こえないのか無視して眠り続ける、菊池。

寝返りを打って布団を頭からかぶる。

隣人が壁を数回軽く叩く音。

布団に入ったまま動かない、菊池。

鳴り続ける目覚まし時計。

再び壁を叩く、隣人。今度はもっと強く乱

暴に。

布団から顔を出して寝ぼけた顔で目覚まし

時計を見る。

壁を叩き続けている、隣人。

菊池、あわてて上半身を起こして目覚まし

時計を止める。

その姿勢のまま隣をうかがう。

隣人、叩くのを止める。静かになる。

同じ姿勢で様子をおかがい続けている、菊

池。

S# 三九 ● 東京クリーニング・乾燥機室

（土曜日・午前十一時頃）

全ての乾燥機、運転している。
菊池、乾燥済みのカゴを四つ縦に並べて入口方向へ移動してゆく。カゴの摩擦音。
入口奥所定の位置にカゴを置き急ぎ足で戻って来る。
左列へ移動して残りのカゴを縦に並べる。
右列乾燥機をちらりと見る。
半分程の乾燥機が止まっている。
縦に並べたカゴを再び入口方向へ運んでゆく。
同様にして戻って来る。
小走りに右列奥へ移動してゆく。
奥の乾燥機の前に立って蓋を開ける。
急いで乾燥機の中へシートを投げ入れてゆく。
かなり乱暴な手つきになっている。
怒っているのかも知れないが表情は変わらず無表情。
蓋を強く閉める、菊池。
大きな金属音が響く。

S# 四〇● A スーパー・店内

(土曜日・午後六時四五分頃)
店内入口付近。
菊池、空の買物カゴを持って牛乳のコーナーに立っている。
屈んで並べられた牛乳をのぞき込んでいる。
しばらくのぞいた後に一番奥から無理に牛乳を抜き取ってカゴに入れる。
牛乳のコーナーから離れて店内奥へと移動し始める。
豆腐のコーナーに度の強い眼鏡をかけた五十前後の主婦らしき女が立っているのが見える。
眼鏡女、腰を折って静かに豆常に顔を近づけてゆく。

豆腐と顔の距離、五センチ程の所まで近づける。
菊池、眼鏡女を見ながらゆっくり移動（近づいて）してゆく。
同じ姿勢のまま豆腐を人差し指で押し始める、眼鏡女。
押した後、首を傾げる。
次々と同じ行為を繰返してゆく、眼鏡女。
菊池、眼鏡女を横目で見ながら無表情に通過してゆく。

S# 四一 ● A スーパー・店内

（土曜日・午後七時頃）

レジ付近。
二台のレジの片方に「休止」の札が置いてある。
残る一台に女が立っている。
客が三人並んでいる。
菊池、四人目の客として並んでカゴを足元に置く。
女を見る。
女、少しうつ向き加減でレジを打っている。
女を見続ける、菊池。
女、顔を上げて客に値段をつけている。
自然な目線で菊池を見る、女。
表情を少し変える。
菊池、小さくお辞儀する。
少し笑って会釈する、女。
菊池の後ろに眼鏡女、並ぶ。
腕に下げたカゴの中を怖い顔で凝視している。
眼鏡女を気にし始める、菊池。
小さく振向いて眼鏡女を見る。
眼鏡女、急に頭を上げて菊池を見る。
慌てて向き直る、菊池。

(土曜日・午後七時十五分頃)

菊池、レジ前に立ってぎこちなく笑っている。

女 「(微笑んで)いらっしやいませ」

菊池 「(小さな声で)こん、ばんわ」

菊池の後ろの眼鏡女、批判的な目つきで二人を見ている。

菊池のカゴを引き寄せる(牛乳、食パン、多数のスナック菓子類)、女。

女、レジを打ち始める

女を盗み見ている、菊池。

女、手を止めて顔を上げる。

「もしかして。よくいらしてました？」

「：？：ここ？」

「ええ(うなづく)」

「あ、はい。時々」

「(笑って小首を傾げ)：本当？」

「：ええ：(ぎこちなく笑う)」

菊池、素早く振り向く。

眼鏡女の顔が十センチ程の距離に近づいている。

眼鏡女、不機嫌な顔で女を睨んでいる。

眼鏡女を直視する、菊池。

眼鏡女、視線を菊池に移動させる。

菊池、慌てて目を伏せて体を戻す。

表情を硬くしてレジ打ちを再開する、女。

菊池、落ち着かない様子で女を見ている。

「(事務的に)千五二八円になります」

少し慌ててコートから財布を取り出そうとする、菊池。

ぎこちない菊池の動作。

(土曜日・午後八時三〇分頃)

スナック菓子の封をやぶる大きな音。
菊池、パジャマ姿でベッドの上に座っている。
テレビからはバラエティー番組の音。
無表情にテレビを見ながらお菓子を食べ始める。
テレビを見ながら規則正しく口にお菓子を運んでゆく。
隣室のドアを開ける音。
菊池、真顔に戻る。
スナック菓子を噛むのを止めて隣の様子をうかがう。
ドアの閉まる音。
隣人とその恋人らしい女の声が小さく聞こえる。
様子をうかがい続けている、菊池。

S# 四四 ● 菊池のアパート・室内

(土曜日・午後九時頃)
菊池、テレビの前に座っている。
チャンネルを変える。チャンネルを変えるガチャガチャ音。
一周して元の番組に戻る。
テレビの横にある新聞を畳に広げる。
テレビ欄を見始める。
隣から性行為を連想させる物音が聞こえ始める。
新聞から目を離して隣の様子をうかがう。
性行為を連想させる物音が続く。
静かにテレビに近づいてボリュームを少しづつ下げる。
隣の様子をうかがう。
立ち上がってゆつくりと壁に近づく。
壁に耳をあてて盗み聞きをする。
女の下品な笑い声。続いて男の笑い声。
壁に耳をあてたまま聞いている。

男と女の普通の会話が聞こえて来る。
落胆した様子で静かに壁から耳を離なす、
菊池。

S# 四五 ● 菊池のアパート・室内

(土曜日・午後十一時頃)
菊池、布団に入って無表情にテレビを見ている。
六畳間の電灯は消えている。
台所とテレビの灯りのみ。
机の上にあるスナック菓子を手に取る。
封を開けて食べ始める。
食べながら無表情にテレビを見続ける、菊池。

S# 四六 ● Aスーパー前のコインランドリー

(日曜日・午前十時頃)
菊池、洗剤と洗濯カゴを持って入って来る。
一番奥の洗濯機へ移動して隣の洗濯機の上に洗剤と洗濯カゴを置く。
ちらりと入口ドアのガラス越しから外を見る。
向えにスーパーのレジ付近が見える。
女が立っている。
暇そうに指先を見ている、女の姿。
菊池、奥の洗濯機の蓋を開けて中へシートを入れる。
続いて洗剤を入れる。
コートから財布を取り出す。
財布から小銭を出して機械へ入れる。
水の流れ出す音。
外(スーパー)を見る。
女の前に店長が立っている。
店長、笑顔で女と雑談している。
女は背中を向けていて表情はわからない。

洗濯機が回り出す音。
菊池、しばらく見た後に室内に一つだけある丸椅子に座る。
スーパーに背を向けて座る。

S# 四七 ● Aスーパー前のコインランドリー

(日曜日・午前十時二〇分頃)

洗濯機の水が抜けてゆく音。

菊池、椅子に座ってコインランドリー所有の雑誌を捲っている。

ドアを開けて男が入って来る。

女物の紙袋と洗剤を持っている。

菊池、雑誌から少し目を離して小さく振向く。

慌てて向き直って雑誌に目を落とす。

男、菊池に気づかず洗濯機を開けてシートを入れている。

続いて洗剤を入れるて蓋をする。

男、小銭を探す動作。

男を気にしながらも雑誌に目を落とし続けている、菊池。

男、洗濯機を運転させずにドアを開けて出てゆく。

少し間をおいて振向く、菊池。

ドアが開けっ放しになっている。

出て行った男、道路を渡ってスーパーへ入ってゆく。

菊池、振り向いたままの体勢でその様子を見ている。

スーパー店内に入って女に何か言っている、男。

女、うなづいている。

しゃがんでレジの下からバッグを取り出す、女。

女、バッグを開けて財布を出す。

自然な目線でコインランドリー(菊池)を

見る、男。
菊池、慌てて体を戻す。
再び雑誌に目を落として読むふりを始める。
男、走ってコインランドリーに戻って来る。
入って来て洗濯機に小銭を入れる、男。
洗濯機に水が入る音。
菊池、身動きせず本に目を落とし続けている。
男が菊池を見ている気配。
体を堅くして雑誌に目を落とし続けている、
菊池。
男、ドアを開けて出てゆく。
強くドアを閉める音。
静かに顔を上げてゆっくり振り向く、菊池。

S# 四八 ● A スーパー前のコインランドリー

(日曜日・午前十時五〇分頃)

菊池、乾燥機の前に立って乾燥したシーツをカゴに入れている。

摩擦音。

女、小走りに道を渡りコインランドリーに向かつて来る。

自然な目線で女を見る、菊池。

女、菊池に気づいて表情を変える。

入口寄りの洗濯機の前で立ち止まる、女。

女、菊池を見る。

「こんにちわ：」

女
菊池

「：こん、にちわ：」

洗濯機の蓋を開けて中から脱水されたシーツを取り出す、女。

取り出したシーツを隣の洗濯機の上へ置く。

急いでいるのか乱暴な手つきだ。

菊池、女を横目で見ながら最初より遅いペ

ースでシーツをカゴに入れている。

菊池を見る、女。

菊池、目を伏せる。
乾燥機へ移動して蓋を開ける、女。
乾燥機の中へシートを乱暴に投げ入れてゆく。

菊池、手を止めて再び女を見る。
女、蓋を閉めて急いで財布から小銭を出そうとする。
百円玉が落ちて転がってゆく。
落ちた百円玉、洗濯機の下に入ってゆく。
女と菊池、百円玉の転がってゆく様子を目で追う。

女、すこし苦笑いをして新たな百円玉を機械に入れる。

乾燥機が回り始める。
菊池、立ち上がって百円玉が潜り込んだ洗濯機へと移動する。

膝について中を覗く、菊池。
菊池、しばらく覗いた後に顔を上げて女を見る。

菊池
「：そこに：」
少し困った顔をして菊池を見る、女。
女
「：すみません：」

菊池、立ち上がる。
スボンの膝が汚いる。
室内を見回す。
乾燥機の取っ手に紙袋を掛ける、女。

女
菊池
「：あの。：結構です」
「：？」
「急いでますから：」
「でも：」

女
菊池
「（お辞儀して）：じゃあ」

女、急ぎ足でドアを開けて出てゆく。
小走りに道を渡ってスパーへ戻ってゆく。
菊池、立ちつくしたまま女の後ろ姿を見ている。

菊池、室内を見回す。
部屋の隅へ移動する。

部屋の隅に置いてあるほうきを取る。
ほうきを持って百円玉の洗濯機へ移動する。
膝をついてほうきで百円玉を取る動作。
多くのほこりと一緒に百円玉が出て来る。
百円玉を手にとってほこりをはらう。
女が持って来た紙袋が掛かっている乾燥機
を見る。
立ち上がって乾燥機へ移動する。
紙袋の中に百円玉をやさしく落とす、菊池。
紙袋に百円玉が落ちる音。

店主

(日曜日・午後十二時頃)
菊池、ドアを開けて店内へと入って来る。
店内には三つの理髪用椅子が有る。
中央の椅子に客ひとりが座っている。
客の後ろの店主、立って客の髪の毛にはさ
みを入れている。
客、眠っているのか目を閉じてまったく動
かない。
入って来た菊池をちらりと見る、店主。
「(ぶつきらぼうに)：らっしやい」
菊池、軽くお辞儀をして入口付近にあるソ
ファに座る。
コートを脱いでソファに置く。
ソファの横に円形の大形ストーブがある。
その上にお湯の入った鍋が水蒸気を上げて
いる。
お湯の煮立つ音。
菊池、店主と客を自然な目線で見る。
目を閉じたまま微動だにしない、客。
店主、無表情に散髪を続けている。
客の髪の毛、毛が多い為か異常に膨れ上が
っている。
熱いのか座る位置を移動してストーブから
少し離れる、菊池。

店主

店主、はさみを止めて鏡越しに客を見る。しばらく見た後、小首を傾げる。菊池をちらりと見る、店主。目を伏せる、菊池。店主、はさみを持ったまま奥へ移動する。奥は自宅になっている。「（超ぶつきらぼうに）おい、客：」店主、無表情な顔で戻って来る。客の後ろへ回って再び散髪を始める、店主。客は相変わらず目を閉じたまま動かない。奥から店主の妻がマスクをしながら出て来る。何か食べていたのか口をもぐもぐさせている。奥の椅子の前で立ち止まって菊池を見る。「（食物を飲み込む）：どうぞ」店主の妻、マスクをする。立ち上がって移動する、菊池。

妻

（日曜日・午後十三〇分頃）
ドライヤーの音。
菊池、店主の妻に散髪されている。
菊池の髪の毛が刈り込まれてゆく。
隣で店主、客の濡れた髪をドライヤーで乾かしている。
客、目を開けて鏡を直視している。
客の髪が乾いてゆくのと比例して髪の毛がどんどん脹れ上がってゆく。
店主、ドライヤーを止める。
鏡越しに膨れた髪の毛を見る。
客、無表情に鏡を直視し続けている。
店主が鏡を見ながら膨れた髪を押しつけるがすぐ元に戻る。
小首を傾げる、店主。
菊池、横目で見ている。

S# 五二 ● S 駅前・南口く地下通路

はさみを止める、店主の妻。
店主の妻、心配そうに店主を見る。
再びドライヤーのスイッチを入れて髪を寝かそうとするが変わらない、店主。
店主の妻、静かに菊池の散髪を再開する。
菊池、鏡越しにちらちらと見続けている。
「あの…(ドライヤーの音でかき消される)」
店主、聞こえないのか必死にドライヤーをあて続けている。
「(大声)すみません！」
店主、一間おいてドライヤを切る。
「？」
「(鏡越しに)このままで、結構です」
「(鏡越しに客の顔を見る)」
店主、怖い顔をしてドライヤーを持ったまま立ち尽くしている。
菊池と店主の妻、二人を見ている。

(日曜日・午後二時頃)

人通りが多い。
手に東急ハンズの紙袋を持っている、菊池。
駅に向かって歩いてゆく。
急に立ち止まって振向く。
菊池の振り向いた先に男の顔が見え隠れしている。
菊池、男を見ている。
地下通路方向へ移動してゆく、男。
菊池、向き直って男の後を追う。
地下通路に入ってゆく、男。
菊池、男との距離を保ちながら尾行する。
地下通路の階段を降りてゆく、菊池。
地下通路の前方に歩く男が見える。
距離を保ちながら尾行を続ける、菊池。

S# 五二 ● S 場外馬券場の前

（日曜日・午後二時三〇分頃）
人通りが多い。

菊池、同じ距離を保ちながら男を尾行し続けている。

男、場外馬券場の中へ入ってゆく。

菊池、少し歩く速度を速めて場外馬券上入口に近づいてゆく。

入口の前で立ち止まっておそるおそる中を覗き込む。

S# 五三 ● 菊池のアパート・室内

（日曜日・午後三時三〇分頃）

菊池、手に東急ハンズの紙袋を持って入ってくる。

部屋のカーテンは開かれていて明るい室内。

六畳間へ移動してテレビの横へ紙袋を置く。

机へ移動してコートのポケットから財布を出して引き出しに入れる。

押入れを開けてコートを脱いで掛ける。

流しへ移動して水道の蛇口をひねる。

石鹸を使って手を丁寧に洗う。

濡れた手をタオルで拭き、六畳間に戻る。

テレビの前に座って紙袋を取って開ける。

梱包された長方形の箱。

「回転テレビ台」と印刷されている。

梱包を外す。破れる音。

箱から回転テレビ台を取り出す。

畳の上に置く。

立ち上がってテレビをも持ち上げて移動させる。

テレビの下にはホコリがたまっている。

押入れへ移動してほうきとちり取りを持って来る。

それを使ってホコリを取り、ゴミ箱へ捨てる。

ほうきとちり取りを戻す。

回転台をテレビのあった場所に置く。
移動させたテレビをその上へ乗せる。
テレビのスイッチを入れてベッドへ移動する。
ベッドに座ってテレビを見る。
しばらく見た後、テレビへ移動し位置を変える。
ベッドへ移動して横になる。
しばらく見た後、テレビへ移動して位置とチャンネルを変える。
競馬中継でチャンネルを止める。
菊池、競馬中継をしばらく見ている。

S# 五四 ● 菊池のアパート・室内

（日曜日・午後五時頃）
菊池、ベッドの上に寝そべってテレビを見ている。
カーテンは開かれたまま。
外は日が沈みかけていて室内はオレンジ色に輝いている。
台所で燃えているストーブ。
室内は薄暗いが電灯は点けていない。
ストーブに目をやる。
しばらく見た後に立ち上がってストーブへと移動する。
かがんでストーブの目盛りを見る。
流し下の収納庫を開く。
中から赤いポリ容器を出してストーブの横に置く。
ストーブの火を消す。
炎が段々と弱まって消えてゆく。
ストーブの火が完全に消えるのをじっと待つ。
石油を注入し始める。流れてゆく石油の音。
ポンプの上部の空気穴を開く。
ホースを慎重に抜く。

少量の石油が床にたれる。
ストーブの蓋を閉めてポリ容器を流しの下
に戻す。
六畳間へ移動してティッシュを箱ごと持って
来る。
床にたれた石油を拭く。
拭いたティッシュを丸めて台所のゴミ箱に捨
てる。
六畳間へ移動してティッシュを戻す。
流しへ移動して水道の蛇口をひねる。
石鹸を使って丁寧に手を洗う。
蛇口を閉めてタオルで拭く。
両手を鼻に近づけて臭いをかぐ、菊池。

S# 五五 ● 菊池のアパート・室内

(日曜日・午後七時三〇分頃)
六畳間の電灯が点っている。
菊池、机の前に座ってどんぶりに入ったイ
ンスタントラーメンを食べている。
麺をすすする音。
顔を上げて前の壁を無表情に見る。
再び麺をすすする。
ベッド枕元にある目覚まし時計を見る。
しばらく見た後、再び麺をすすする。
もう一度目覚まし時計を見る。
しばらく見た後にラーメンのスープを飲む、
菊池。

S# 五六 ● 男と女のアパートの前・路上

(日曜日・午後八時三〇分頃)
菊池、腕時計を見る。
路上 a 奥に立って路上 b 方向を見ている。
自転車に乗った女が路上 b 上を通過してゆ
く。
菊池、女を見ながら静かに路上 b へと移動
する。

S# 五七 ● 路地

女、駐車場入口で自転車から降りて引いてゆく。
アパートには電灯が点っている。
路上bに面した窓が静かに開き男が顔を出す。
菊池、女を見ながら路上b下方向へ移動してゆく。
女を見ている為、男には気づいていない。
男、しばらく菊池を見た後に窓を閉める。
男の影が窓から離れて消える。
女、駐車場奥へ移動してゆく。
男がコートを羽織りながらけたたましい音と共に階段を降りて来る。
菊池、音の方向を見る。
立ち止まる。
男、一階に降りて走り出す。
立ち止まって男を見る、女。
男、女に何か言いながら近づく。
その言葉を受けて女、菊池を見る。
菊池、少し迷った後に路上b上方向へ小走りに逆戻りし始める。
路上bからaへ曲がる。
曲がる時に振向いて駐車場入口方向を見る。
男、女から自転車を奪い取って菊池を追って走り出す。
駐車場に立ちつくしたまま男と菊池を見ている、女。
菊池、あわてて本気で走り出す。
猛烈にペダルをこいで追ってゆく、男。
必死に走る、菊池。

(日曜日・午後九時頃)
道幅五メートル程の道。

菊池、走って来る。
しばらく走って来ると自転車に乗った男が

道を曲がって来る。
男、必死にペダルをこいで迫って来る。
振り返って男を見る、菊池。

菊池と男の距離は十数メートル程。
菊池、更に細い道に曲がる。
道幅三メートル程の道。

男、ブレーキ音をさせながら曲がって来る。
必死に走る、菊池。

男、気が狂った様にペダルをこいで迫って来る。

菊池と男の距離がどんどん縮まってゆく。

菊池、道成りに右に曲がる。同じ位の道幅だがジャリ道。

左手に神社の境内。

男、自転車から飛び降りる。

自転車を放り投げて走り出す。

ジャリを踏む大きな足音と共に走って来る、菊池。

男、同じ様に大きな音を出して迫って来る。

菊池に手の届く所まで近づいている、男。

男、手を伸ばして菊池のマフラーを強くつかむ。
バランスを崩してジャリ道に倒れる、菊池。

男、素早く菊池の上に覆い被さる。
菊池と男の激しい息使い。

両手で顔を覆って顔を隠す、菊池。
「（呼吸を乱して）おい！」

男、菊池の腕を強く引っ張って顔を見ようと試みる。

「おい！」

菊池の顔が半分程見える。

男、乱暴に菊池の帽子をはぎ取る。

髪の毛を強くつかみ上げる。

菊池、痛さに耐えかねて顔を上げる。

菊池の顔を覗き込む、男。

「……」

菊池、男を見ない様に視線を外している。

乱暴に手を離す、男。
菊池、力なく顔を伏せる。
静かに立ち上がってスポンを軽く払う、男。
菊池、うづくまっただま動かない。
菊池を上から見ている、男。
菊池、動かないまま。
体を反転させて歩き出す、男。
ジャリの足音。
菊池、しばらくじっとしたまま。
放り投げた自転車を起こしてフレームから消える、男。
菊池、静かに顔を上げて立ち上がる。
全身を払う。
地面に落ちた帽子を拾う。
少し歩いてマフラーを拾おうとする。
自然に上を見る。
道に面して家の二階の窓。
おばさん、菊池を見下ろしている。
視線を感じて無表情に二階のおばさんを見上げる、菊池。
おばさん、慌ててカーテンを閉める。
しばらく閉められたカーテンの窓を見上げている。
静かにマフラーを拾い上げてよごれ払って首に巻く。
ゆっくり歩き出す、菊池。
ジャリの足音。

S# 五八 ● 菊池のアパート・室内

(日曜日・午後十時頃)

暗い室内。

菊池、ドアを静かに開けて入って来る。

廊下の電灯が室内に差し込む。

室内は冷えて古て息が白い。

静かにドアを閉めて内鍵を下ろす。

六畳間へ移動して電灯を点ける。

ストーブへ移動して火を点ける。
静かに燃え始めるストーブ。
しゃがんで燃えてゆくストーブの火を見て
いる。
火が段々大きくなってゆく。
手をかざしてあたる。
立ち上がってお尻をあてる。
漠然とした目つきで室内を見ている、菊池。
鼻をすすする。
ベッドへ移動してティッシュを抜く。
鼻をかむ。
使用済みのティッシュをゴミ箱へ捨てる。
テレビへ移動してスイッチを入れる。
回転台を使って位置を少し変える。
ベッドへ移動してコートを着たまま座る。
無表情にテレビを見る、菊池。

S# 五九 ● 東京クリーニング・乾燥機室

(月曜日・午前八時三〇分頃)
薄暗い室内。
窓から間接光が入って室内奥を照らしてい
る。
菊池、入って来る。
入口脇にあるブレイカーを上げる。
不規則に点灯し始める蛍光灯。
歩き出して右列乾燥機へ近づく。
手前から順々に乾燥機の電源を入れてゆく。
小さな電気音がひとつひとつ重なってゆく。
右列全ての電源を入れる。増幅する電気音。
菊池、一番奥の乾燥機の電源を入れて立ち
止まる。
そのまま静止画像となる、画面。

S# 六〇 ● オール・スタッフ・クレジット

静止画像。
浮かび上がるオール・スタッフ&キャス

ト・クレジツト。

状況音のみが続く。

菊池の声 「：ございます」

係長の声 「おはよう」

菊池の足音。

係長の声 「タカハシ君。：菊池君：」

タカハシの声 「タカハシです。よろしくお願ひします」

菊池の声 「：菊池、です：」

係長の声 「じゃあ、よろしくね」

菊池の声 「：はい：」

係長の足音（松葉杖）。

菊池とタカハシの状況音が続く。

【おわり】